

## 令和元年度男女共同参画に関する県民の意識・実態調査 の概要（速報値）

### 1. 調査の範囲及び対象

島根県内に居住する満 18 歳以上の男女

### 2. 標本数と標本抽出方法

選挙人名簿による層化二段無作為抽出法により、男女 2,000 人を抽出

### 3. 調査の方法と実施時期

郵送配布・郵送回収による郵送調査法

令和元年 7 月 23 日（火）調査票発送

令和元年 9 月 30 日（月）最終回答票到着

### 4. 調査の内容

性別役割、女性の社会参画、女性と仕事、仕事と家庭生活・地域・個人の生活、女性の人権、行政への要望など、男女共同参画に関わる重要課題について、全 18 問のアンケート

### 5. 回収結果

調査標本数 2,000 人

回収数 900 人(うち 4 件無効)

有効回収数 896 人(女性 494 人、男性 379 人、その他 1 人、性別不明 22 人)

有効回収率 44.8%

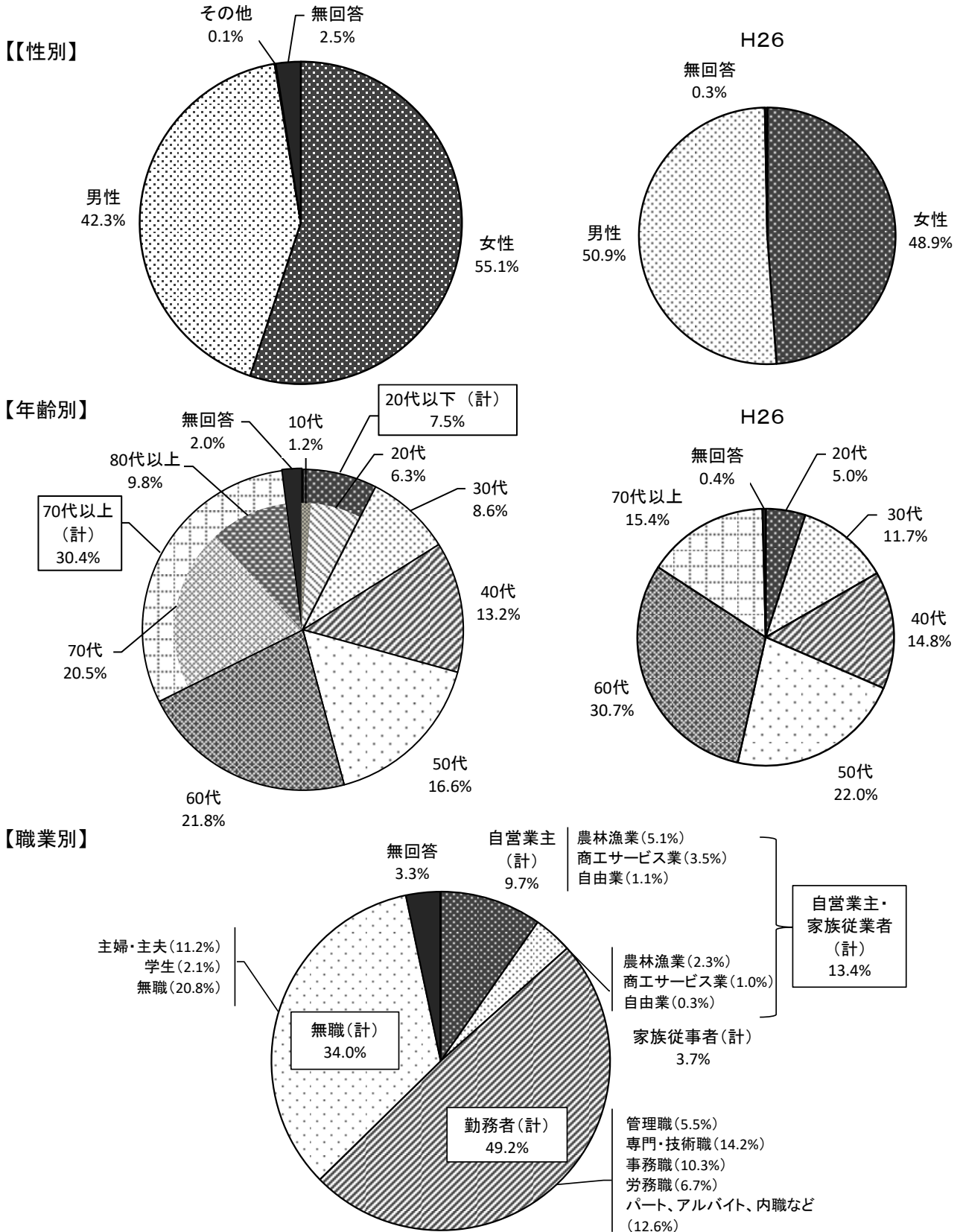
### 6. 調査結果

別添のとおり（全体 18 問中、12 問を抜粋）

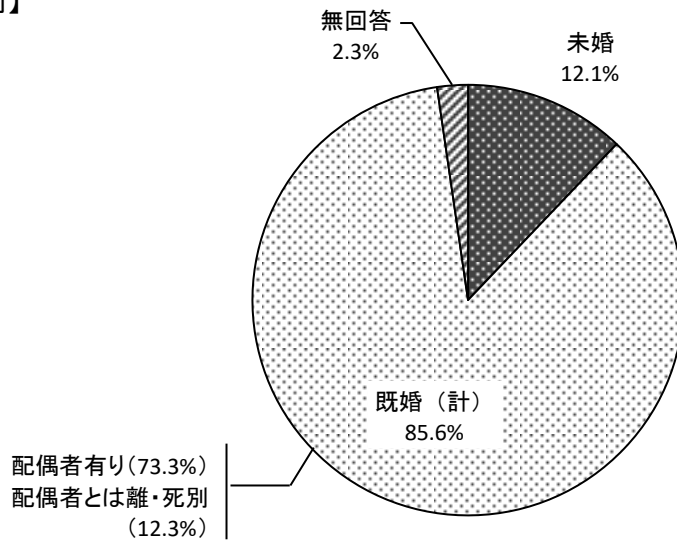
## 回答者の特性

※平成 26 年度に行った島根県の「男女共同参画に関する県民の意識・実態調査」(以下、H26 県調査)と異なり、今回、性別では女性の割合(55.1%)が男性(42.3%)を上回った。

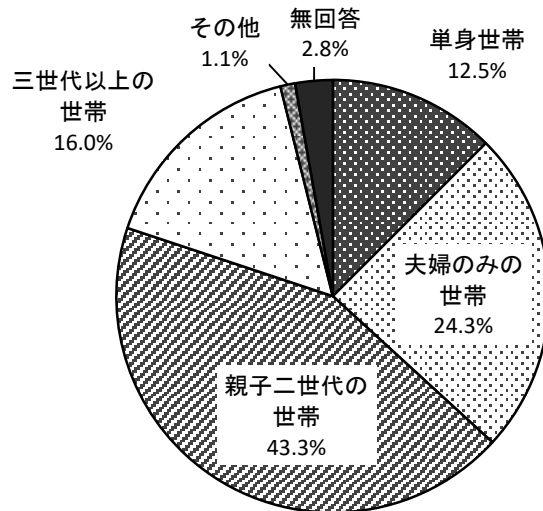
※年齢別については、60代以上で回答者全体の52.1%を占めている。特に、H26 県調査の対象が20歳以上の男女だったのに対し、今回調査は18歳以上を対象として対象年齢が広がったにも関わらず、70代以上の割合(30.4%)はH26 県調査(15.4%)を15.0ポイント上回った。



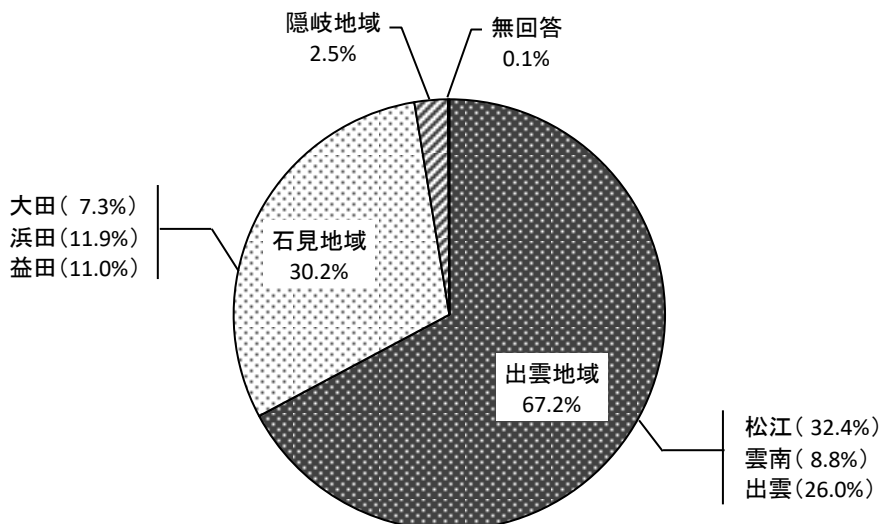
【配偶関係別】



【世帯状況別】

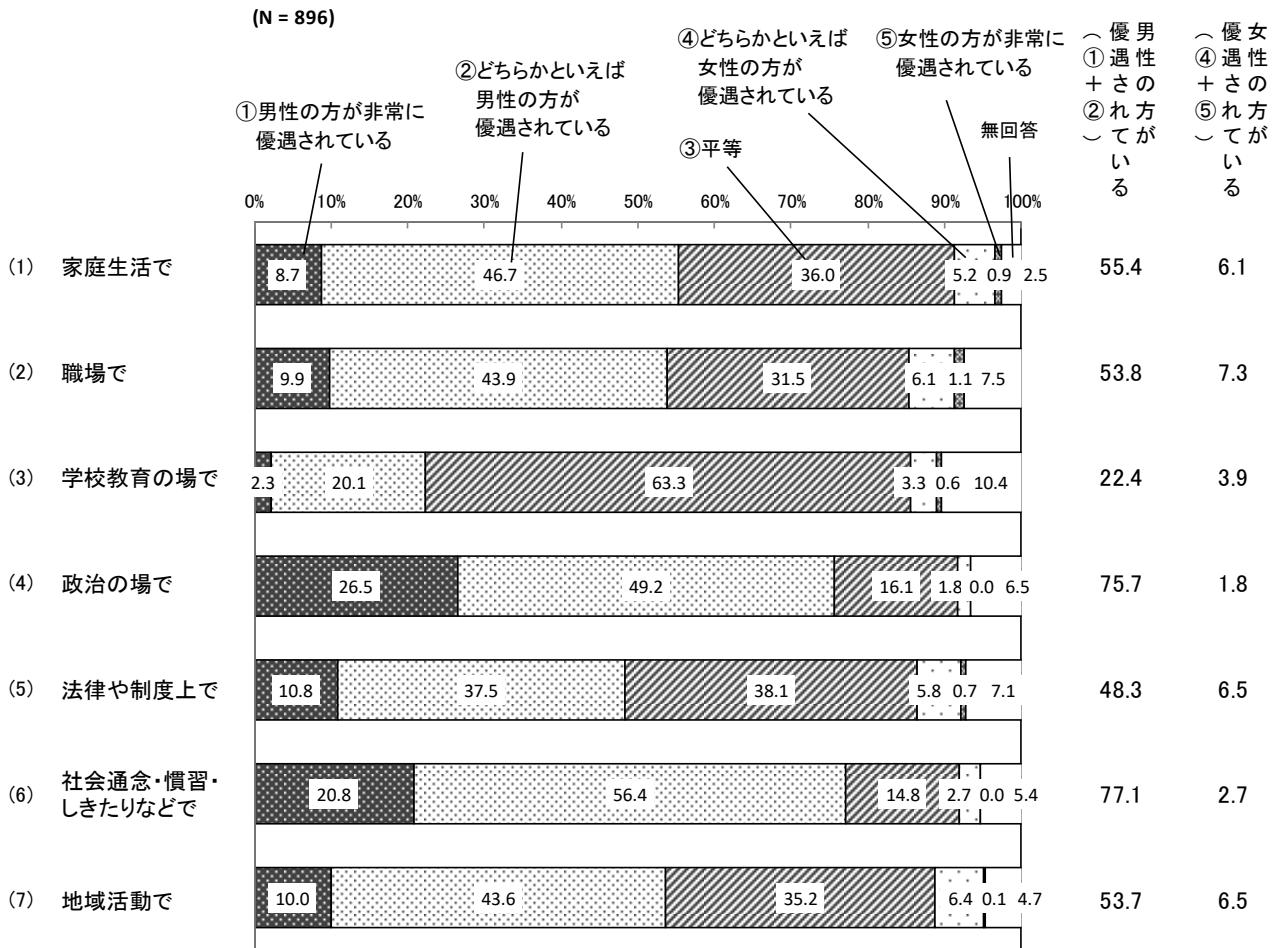


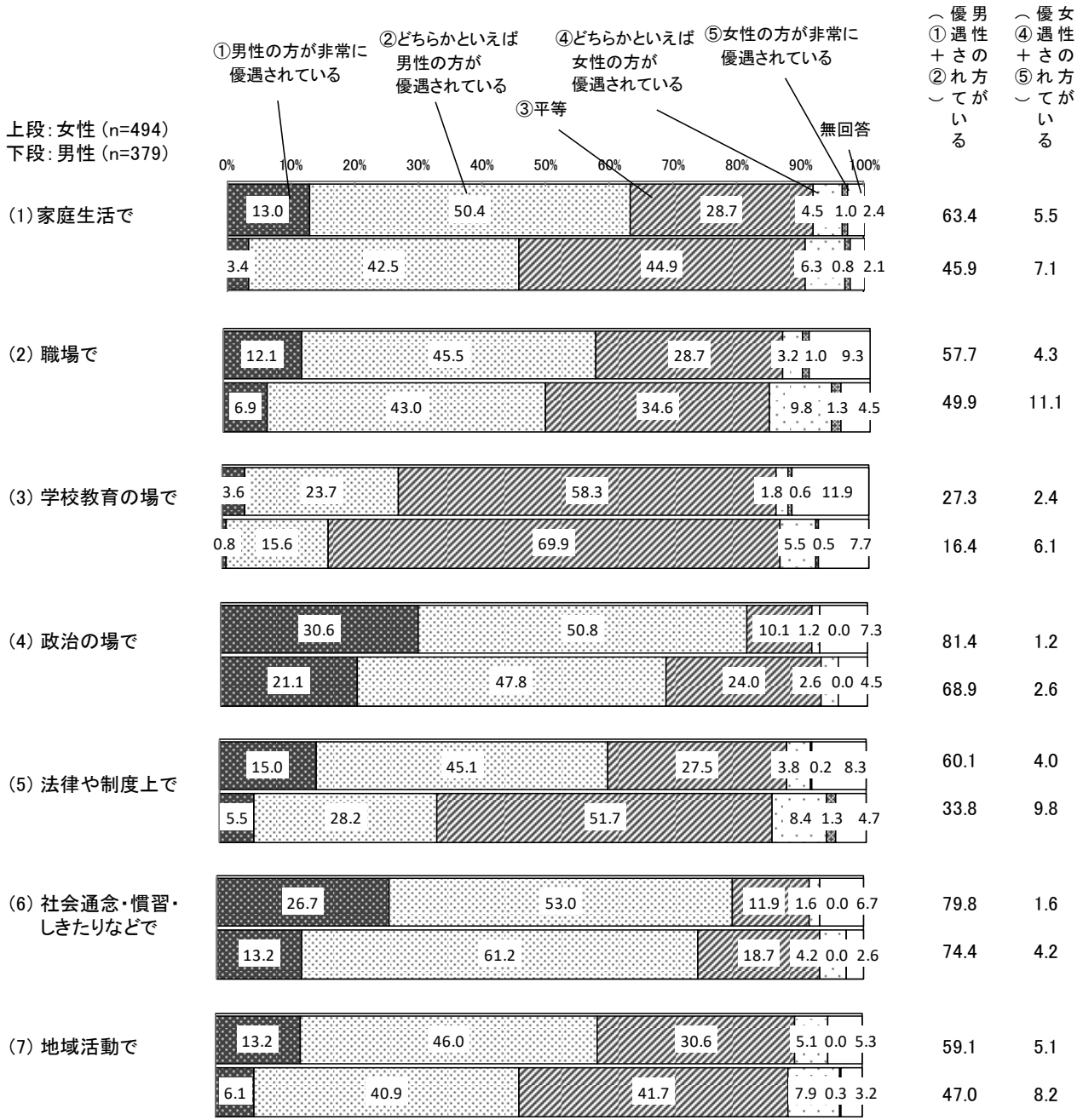
【地区別】



問1 次にあげるような分野で男女の地位は平等になっていると思いますか。  
 (〇はそれぞれ1つずつ)

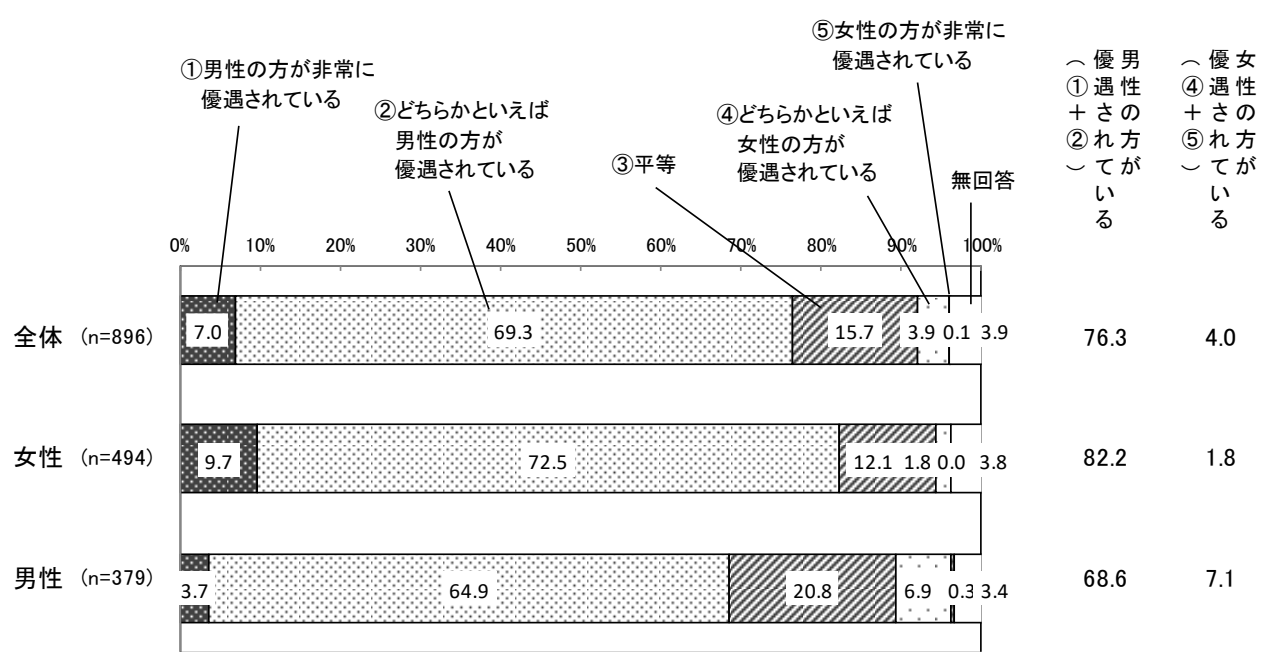
- 男女の平等感について、「平等」とする回答が高い分野は「学校教育の場」であり、63.3%だが、それ以外の分野ではいずれも「平等」とする意識は低く「男性の方が優遇されている(計)」が高い。
- すべての分野において、「平等」とする回答は男性の方が女性を上回っていて、男女差の大きい分野は「法律や制度上で」24.2ポイント差(男性51.7%、女性27.5%)、「家庭生活で」16.2ポイント差(男性44.9%、女性28.7%)、「政治の場で」13.9ポイント差(男性24.0%、女性10.1%)となっている。
- 男女の地位が平等だと思う人の割合(7分野平均)は33.6%であり、「第3次島根県男女共同参画計画」(以下、県3次計画)の目標値(40%)には届いていない。





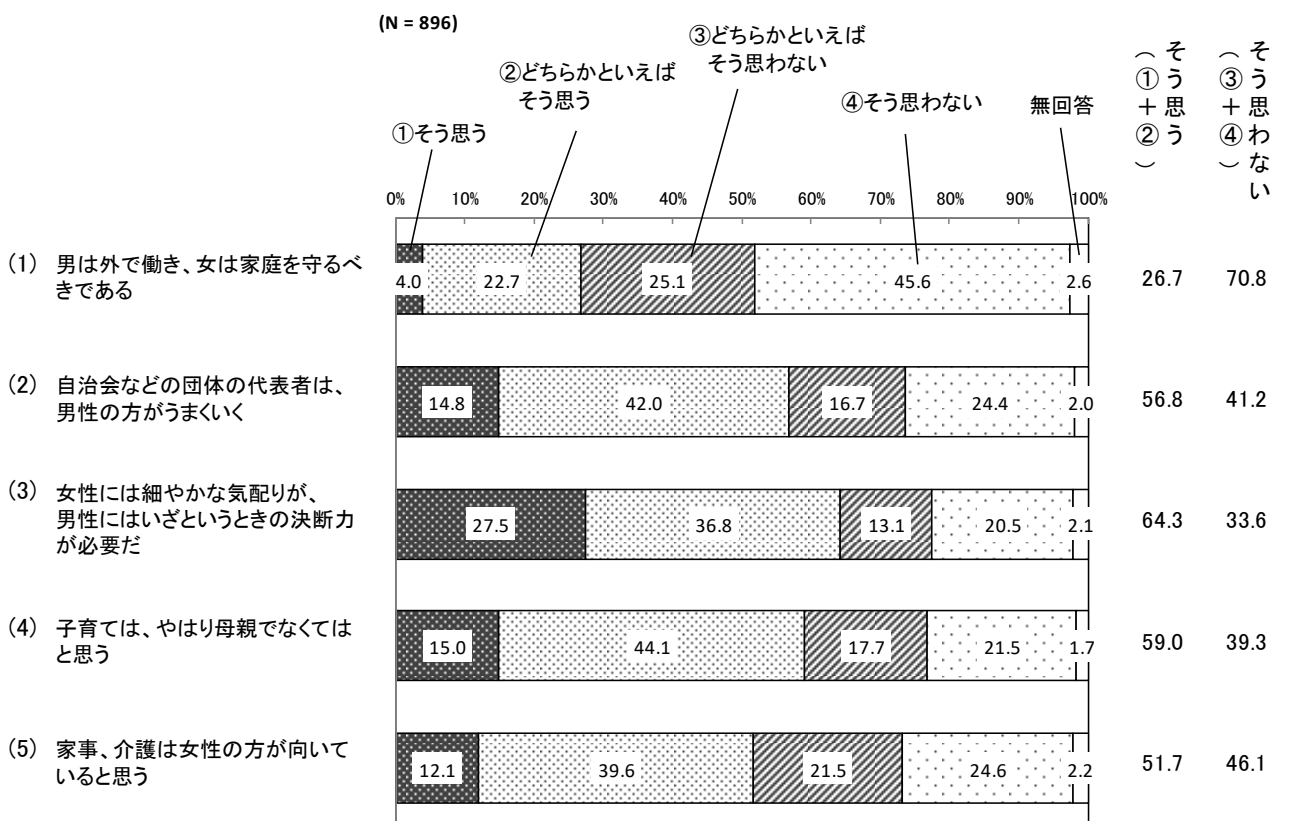
問1-2では、社会全体でみた場合には、男女の地位は平等になっていると思いますか。(○は1つ)

- 社会全体で見た男女の平等感について、「平等」とする回答は15.7%で、H26県調査(15.7%)と同水準であった。
- 男女の回答を比較すると「男性の方が優遇されている(計)」とする回答は、女性(82.2%)の方が男性(68.6%)を13.6ポイント上回っており、H26県調査(男性75.1%、女性84.1%)の9.0ポイント差から、男女の意識の差が広がっている。



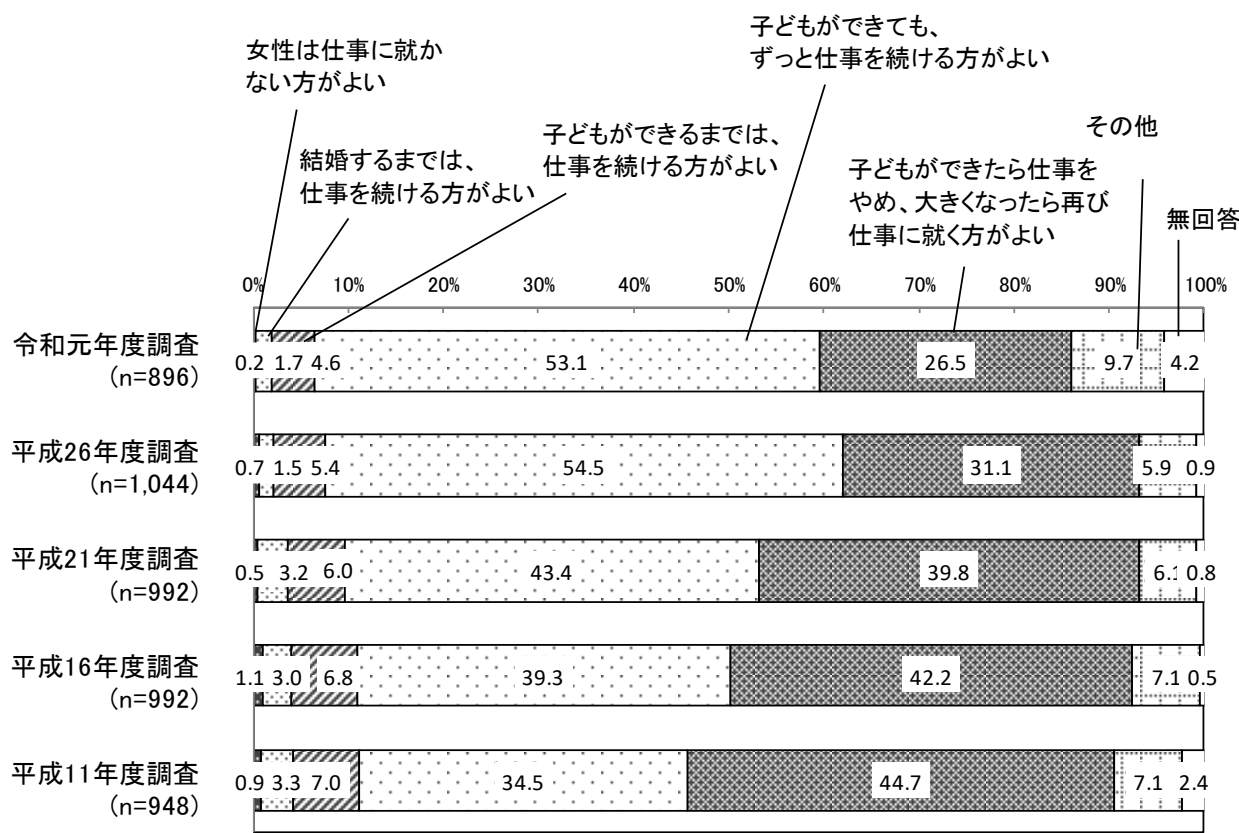
問2 次にあげることがらについて、あなたはどのように思いますか。(○はそれぞれ1つずつ)

- 典型的な性別役割意識について尋ねる「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」という考えに否定的な回答は70.8%で、今回の調査で初めて7割を超えた。ただ、それでも「県3次計画」の目標値(80%)には届いていない。
- それ以外の4つの事柄については、肯定的(計) > 否定的(計)で、肯定派がまだまだ過半数を占める。
- H26県調査と比較すると、5項目すべてで性別役割意識を否定する回答が増加し、特に「子育てはやはり母親でなければと思う」という意識に否定的な回答の合計が10.2ポイント増(H26県調査29.1% → 今回調査39.3%)と大きく変化した。



問5 一般的に女性と仕事について、あなたはどうお考えですか。(○は1つ)

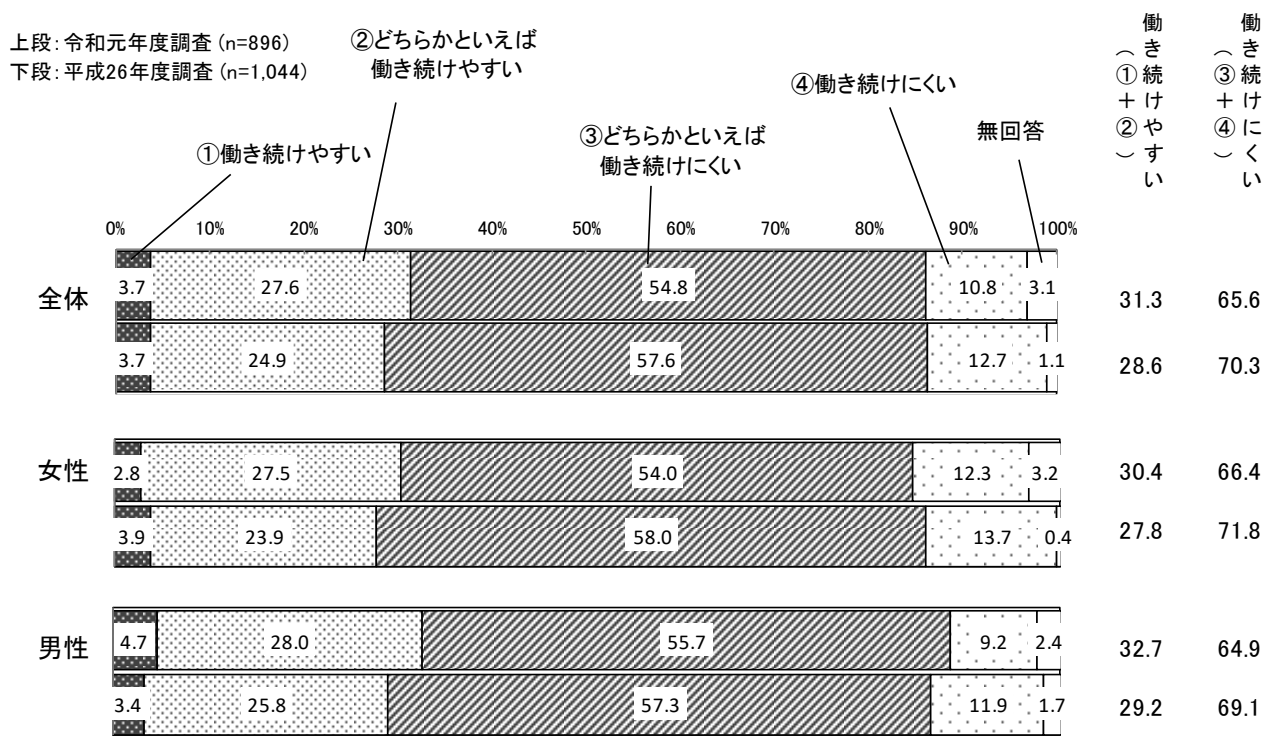
- 女性と仕事に関する考え方については、「子どもができて後もずっと仕事を続ける方がよい」(就労継続型)とする回答が53.1%と過半数を占めている。
- 一方、就労継続型の次に支持されている「子どもができたなら仕事をやめ、大きくなったら再び仕事に就く方がよい」(中断・再就労型)の回答は平成11年度調査から毎回減少しており、今回も減少した。
- H26 県調査と比較すると、「その他」(H26 県調査 5.9%→今回調査 9.6%)と「無回答」(H26 県調査 0.9%→今回調査 4.2%)とする回答が増加した。中でも「その他」を選択した人の具体的内容に「本人や、家族が決めることである」、「本人の意思を尊重したい」等の記述が複数あり、ライフスタイルの多様化も推察される。





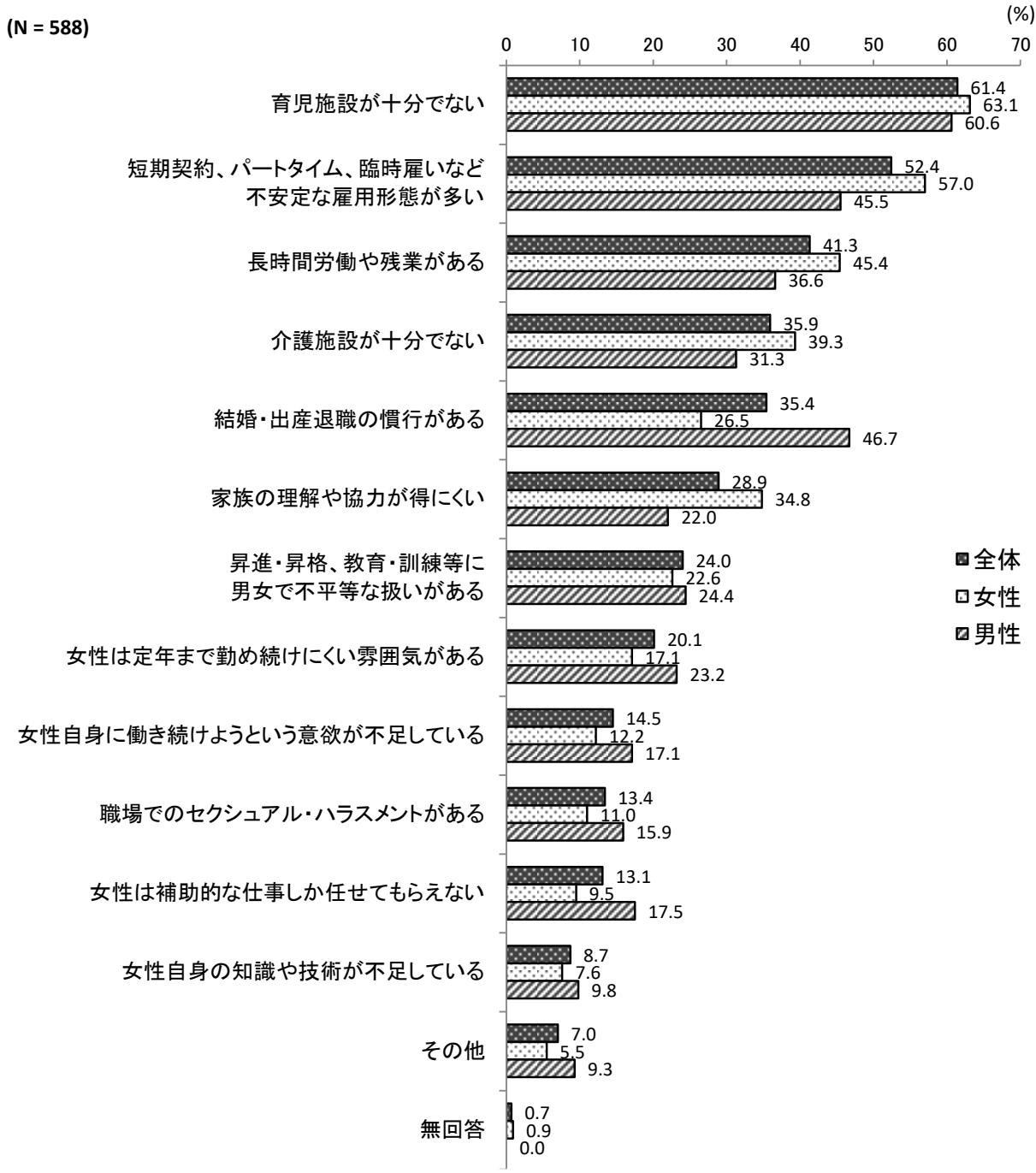
問6 一般的に、女性が働き続けていくことについて、現在どのような状況にあると思いますか。(〇は1つ)

- 女性が働き続けていくことについて、「働き続けにくい(計)」とする回答は65.6%と6割を超え、男女差もあまりない。
- ただ、H26 県調査と比較すると「働き続けにくい(計)」は減少し(H26 県調査70.3%→今回調査65.6%の4.7ポイント減)、「働き続けやすい(計)」はやや増加した(H26 県調査28.6%→今回調査31.3%の2.7ポイント増)。



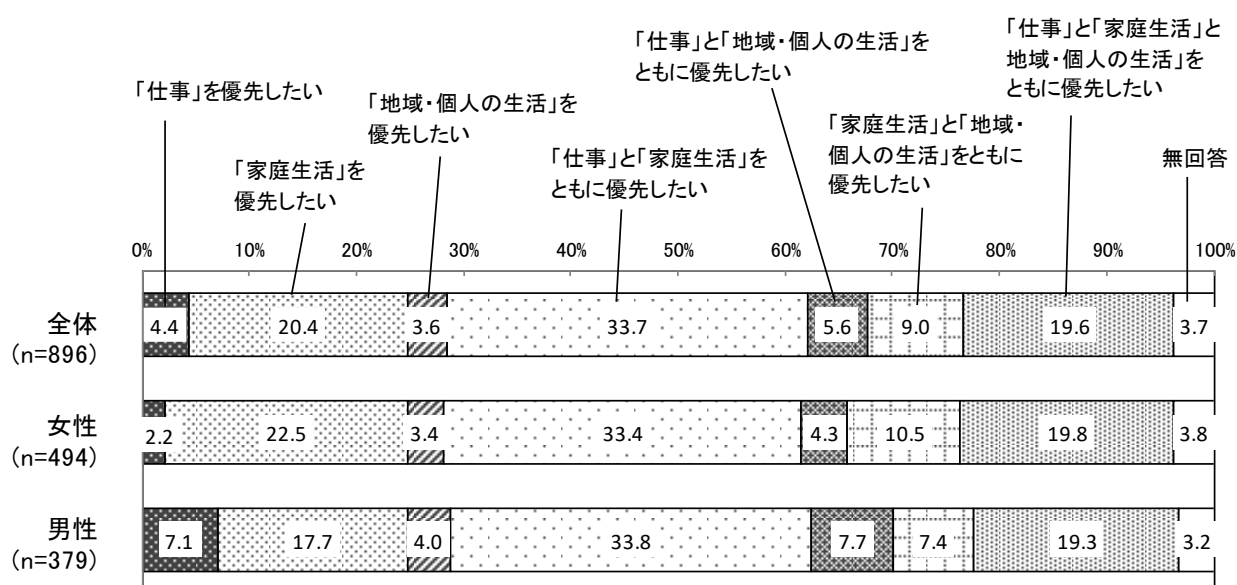
問6-1 女性が働き続けていく上で、障害となっているのはどのようなことだと思いますか。  
 (〇はいくつでも)

- 女性が働く上での障害について、最も回答が多いのは「育児施設が十分でない」(61.4%)で、次いで「短期契約、パートタイム、臨時雇いなど不安定な雇用形態が多い」(52.4%)、「長時間労働や残業がある」(41.3%)、「介護施設が十分でない」(35.9%)となっている。
- 男女の回答を比較すると、「結婚・出産退職の慣行がある」とする回答は、男性(46.7%)の方が女性(26.5%)を20.2ポイント上回っている。一方で「家族の理解や協力を得にくい」とする回答は、女性(34.8%)の方が男性(22.0%)を12.8ポイント上回っており、性別によって女性が働き続けにくいとする理由に差がある。



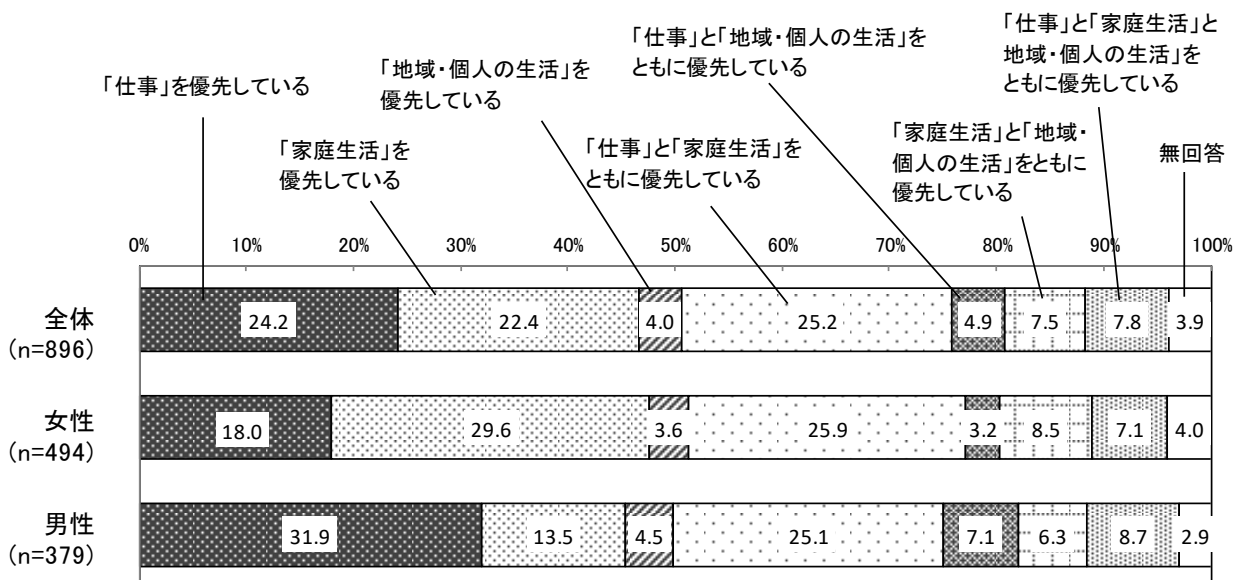
問7 生活の中での、仕事と家庭生活または地域・個人の生活の優先度について、お聞かせください。  
 (1) まず、あなたの希望に最も近いものはどれですか。(○は1つ)

- 希望に近いものとして、最も回答が多いのは「仕事と家庭生活」(33.7%)で、次いで「家庭生活」(20.4%)、「仕事と家庭生活と地域・個人の生活」(19.6%)となっている。
- 男女の回答を比較すると、男女とも1位は同じだが、女性で2番目に支持が多いのは「家庭生活」、3番目が「仕事と家庭生活と地域・個人の生活」と全体と同じ順になっているのに対して、男性は2番目と3番目が女性、全体と逆になっている。
- 「仕事」とする回答は、男性(7.1%)の方が女性(2.2%)を上回っている一方で、「家庭生活」とする回答は、女性(22.5%)の方が男性(17.7%)を上回っている。



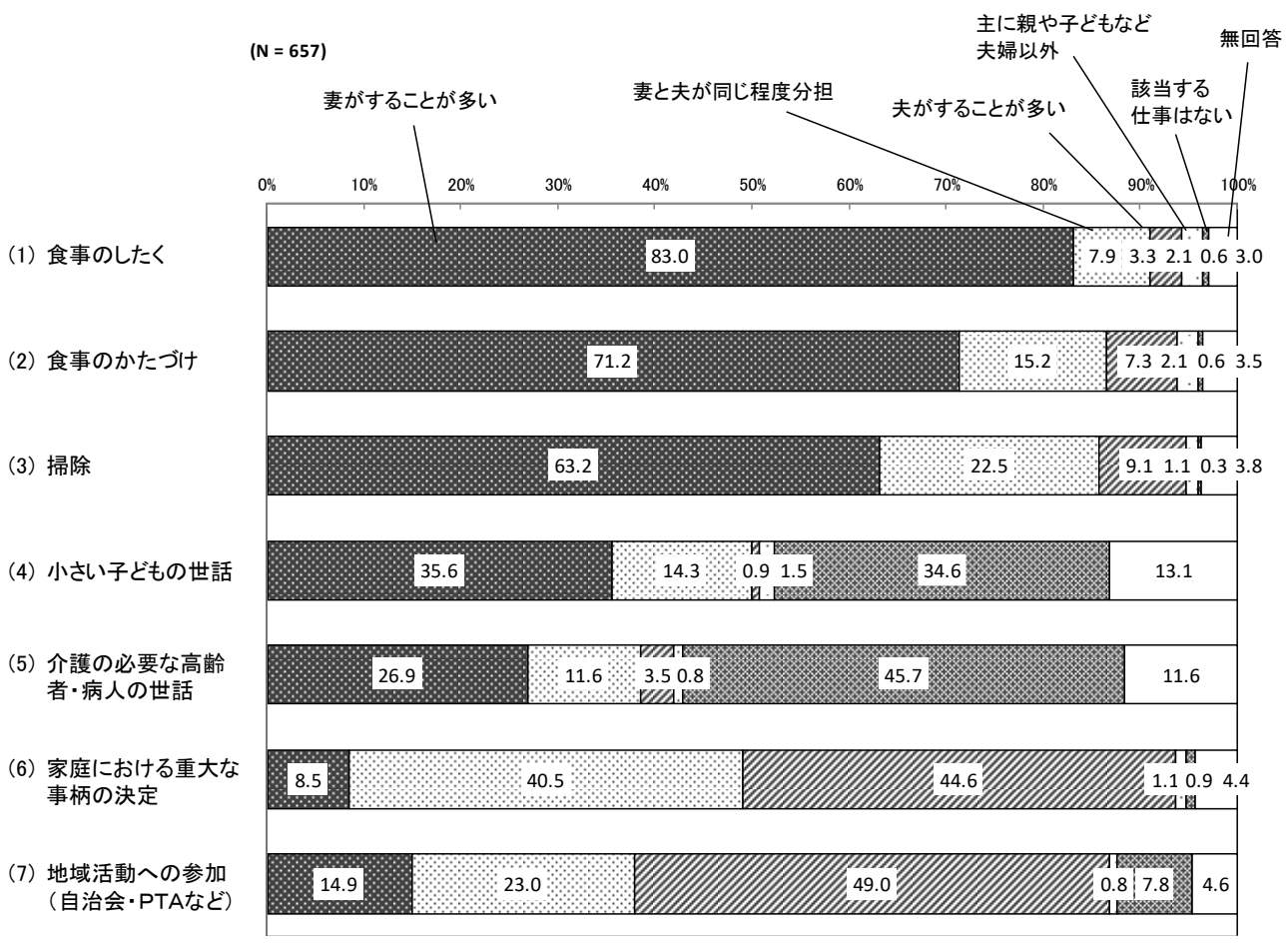
問7 生活の中での、仕事と家庭生活または地域・個人の生活の優先度について、お聞かせください。  
 (2) それでは、あなたの現実(現状)に最も近いものはどれですか。(○は1つ)

- 現実(現状)に近いものとして、20%を超えて支持が高かったのは「仕事と家庭生活」(25.2%)、「仕事」(24.2%)、「家庭生活」(22.4%)の3つであった。
- 男女を比較すると、女性で最も高かった「家庭生活」(29.6%)を選択した男性は13.5%(16.1ポイント差)。一方、男性で最も高かった「仕事」(31.9%)を選択した女性は18.0%(13.9ポイント差)にとどまっている。
- 前問の希望と本問の現実(現状)とを比較すると、「仕事」(希望4.4%→現実24.2%の19.8ポイント差)と「仕事と家庭生活」(希望33.7%→現実25.2%の8.5ポイント差)、「仕事と家庭生活と地域・個人の生活」(希望19.6%→現実7.8%の11.8ポイント差)で回答格差が大きく、希望としては、「仕事と家庭生活」または「仕事と家庭生活と地域・個人の生活」を両立させたいにも関わらず、「仕事」優先という現実の傾向が伺える。

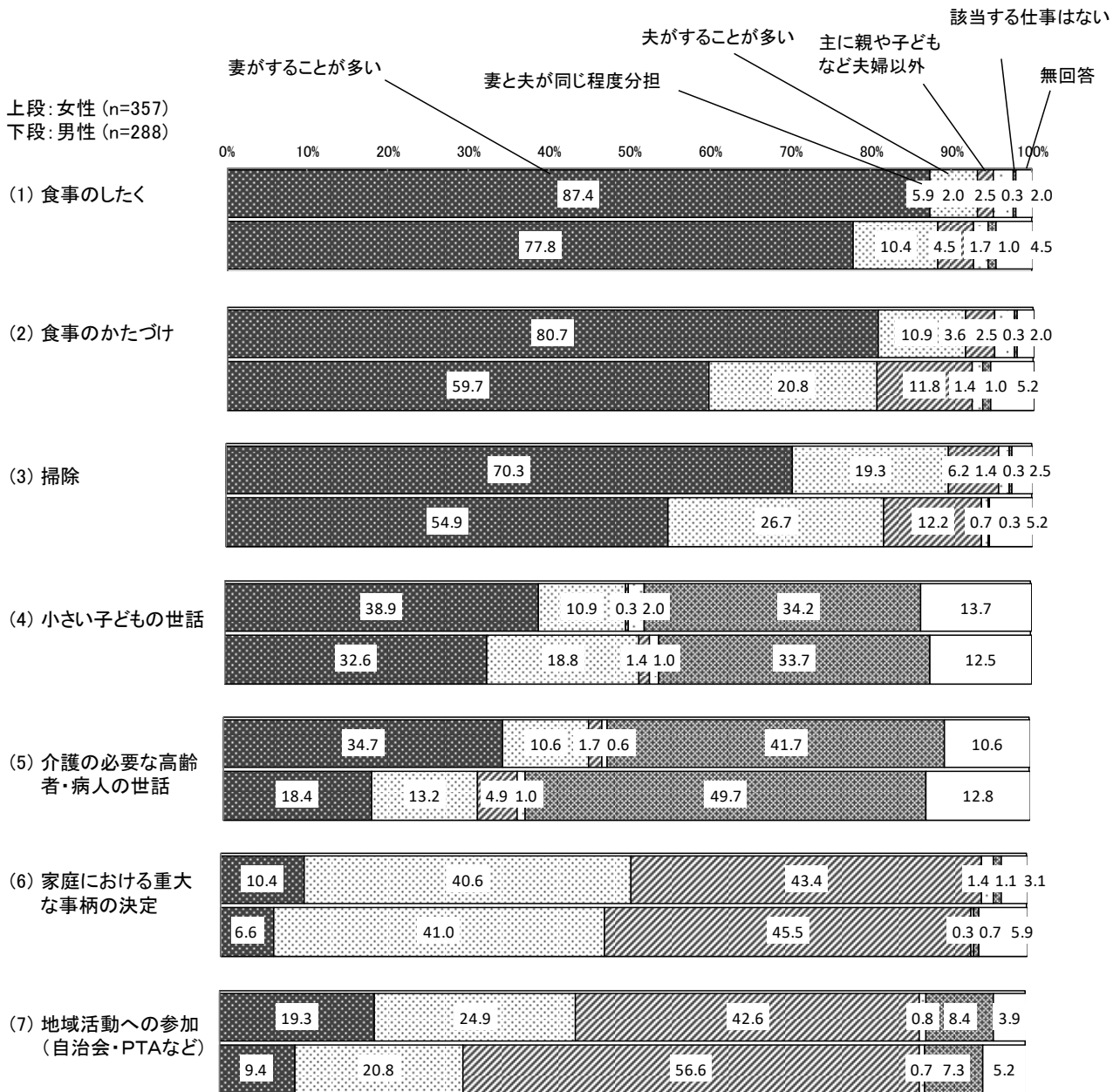


問9 家庭の中で次の仕事はどなたが担当されていますか。(○はそれぞれ1つずつ)

● (1)～(5)の家事・育児・介護項目について、「該当する仕事はない」を除くと、「妻がすることが多い」とする回答が最も多くなっている。

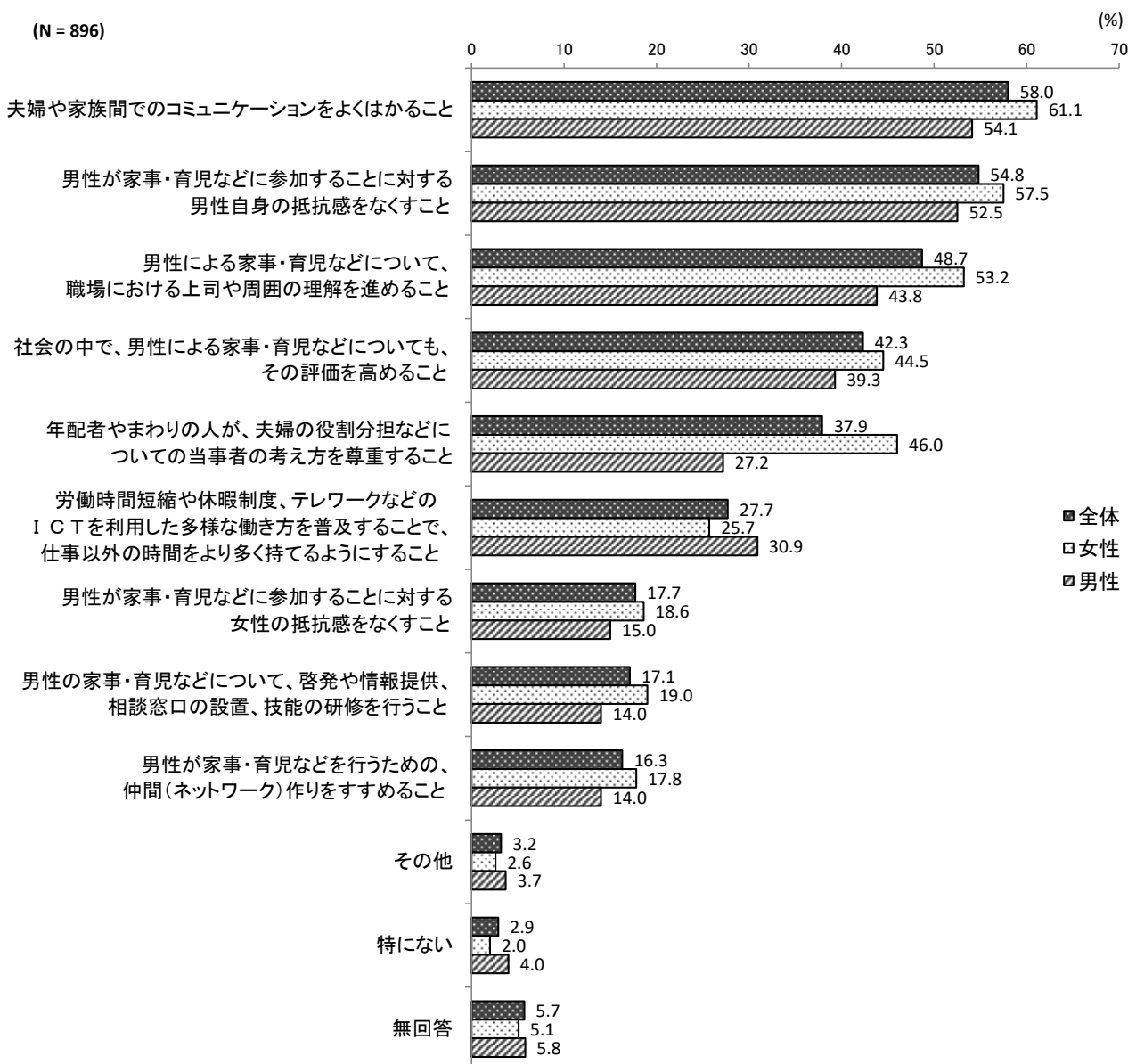


●男女を比較すると、(1)～(7)すべての仕事に対して「妻がすることが多い」とする回答は、女性の方が男性より多く選択していて、特に、「食事のかたづけ」で21.0ポイント(女性80.7%、男性59.7%)、「介護の必要な高齢者・病人の世話」で16.3ポイント(女性34.7%、男性18.4%)、「掃除」で15.4ポイント(女性70.3%、男性54.9%)もの差がある。反対に、「夫がすることが多い」を選択したのは、いずれの仕事も男性の方が女性よりも多く、これら家庭での仕事に対して、担い手意識のずれがある。



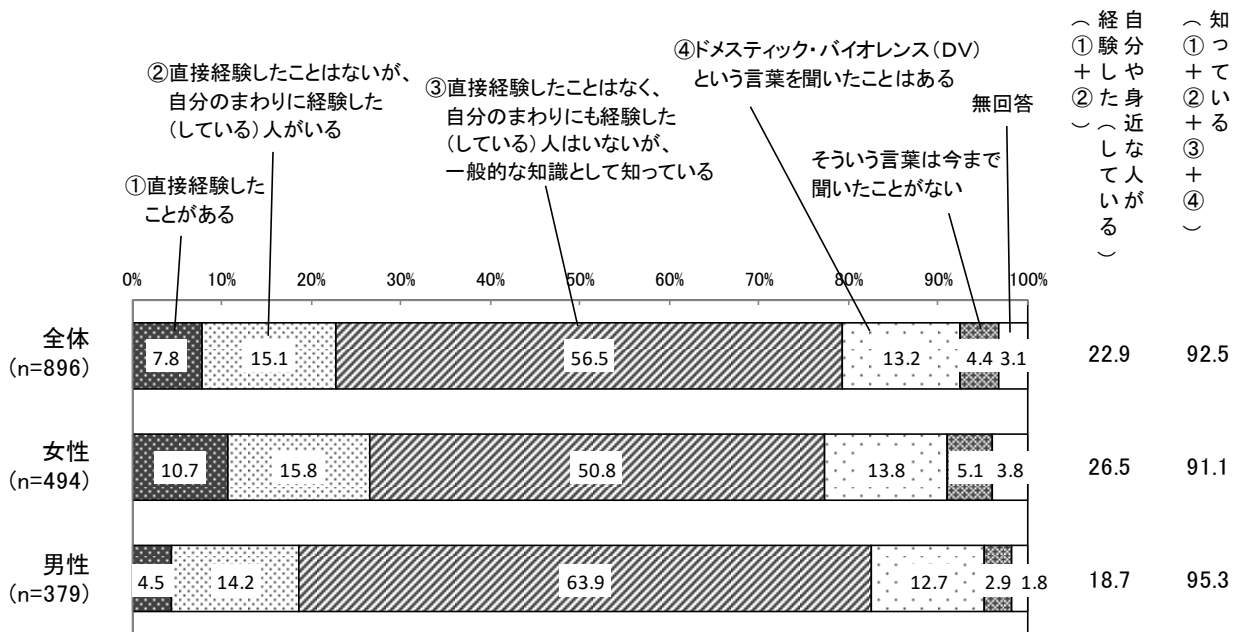
問10 今後、男性が家事、子育て、介護、地域活動に積極的に参加していくためにはどのようなことが必要だと思いますか。(〇はいくつでも)

- 必要な方策として回答が多いのは「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかること」(58.0%)、「男性が家事・育児などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」(54.8%)、「男性による家事・育児などについて、職場における上司や周囲の理解を進めること」(48.7%)となっている。
- 男女を比較すると「年配者やまわりの人が、夫婦の役割分担などについての当事者の考え方を尊重すること」とする回答では、女性(46.0%)の方が男性(27.2%)より多く(18.8ポイント差)、反対に「労働時間短縮や休暇制度、テレワークなどのICTを利用した多様な働き方を普及することで、仕事以外の時間をより多く持てるようにすること」とする回答では、男性(30.9%)の方が女性(25.7%)を上回っている(5.2ポイント差)。



問12 配偶者（パートナー）などふたりの間でふるわれる身体的・心理的・性的な暴力（ドメスティック・バイオレンス（DV））が問題とされていますが、あなたは、ドメスティック・バイオレンス（DV）による被害を経験したり見聞きしたことがありますか。（○は1つ）

- 「直接経験したことがある」及び「直接経験したことはないが、自分のまわりに経験した（している）人がある」を合わせた回答は22.9%で、さらに「一般的な知識として知っている」、「ドメスティックバイオレンス(DV)という言葉を見たことがある」まで含めたDVを認知している人の割合は92.5%であった。
- 自分や身近な人が経験した人の割合は女性の方が男性より7.8ポイント上回っているが、認知している割合は男性の方が女性より4.2ポイント上回っている。

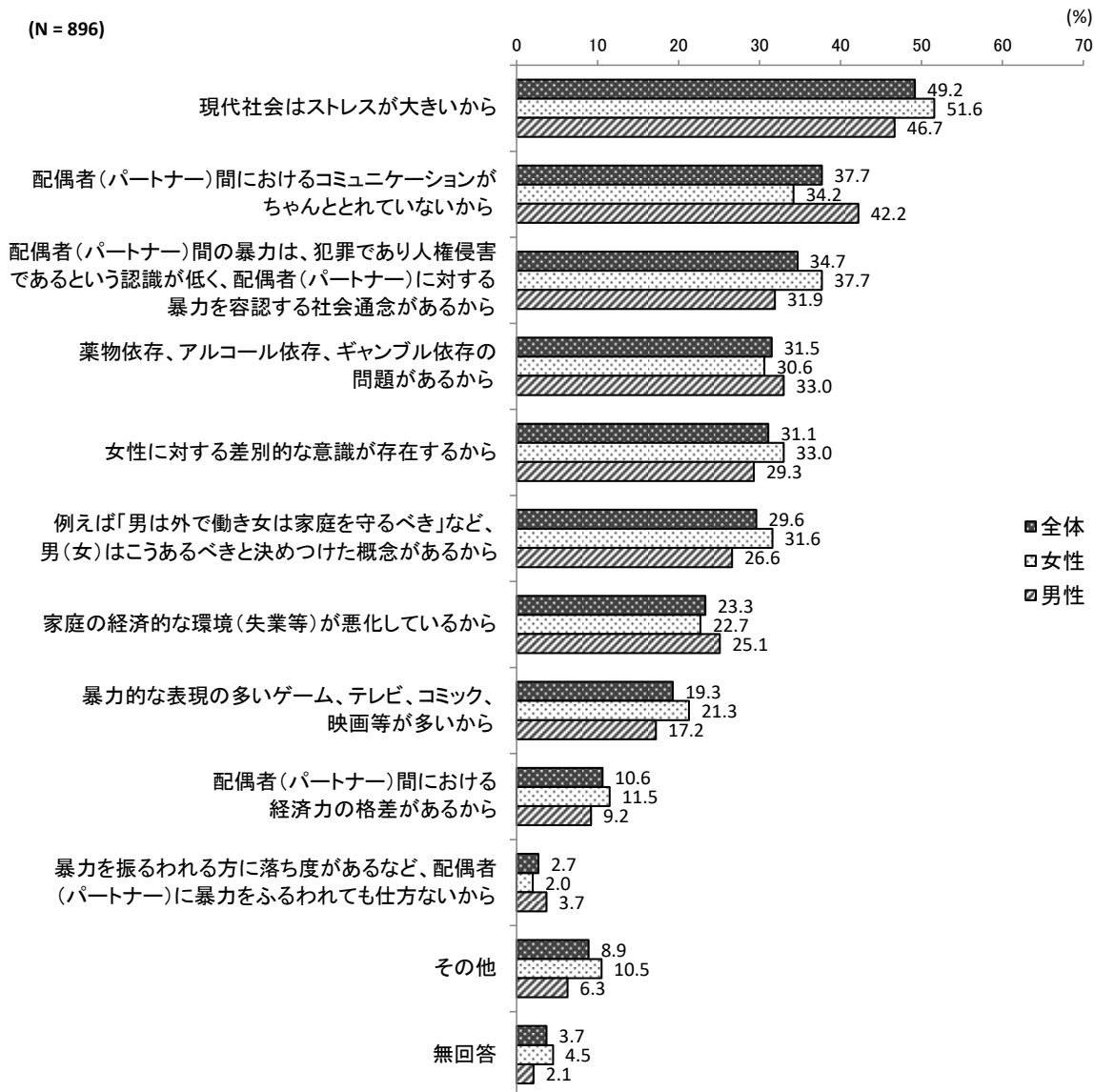




問13 ドメスティック・バイオレンス（DV）が起こる背景や要因は何だと思いますか。（〇はいくつでも）

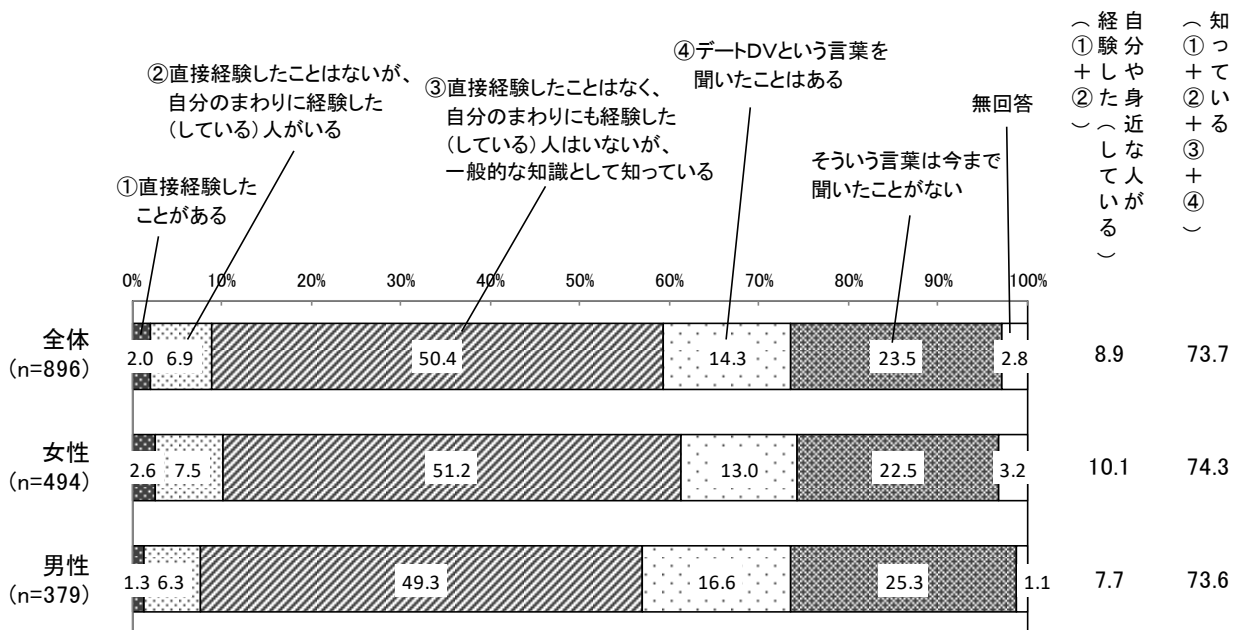
●DVが起こる背景や要因について、最も多いのは「現代社会はストレスが大きいから」（49.2%）で回答者の半数近くが選択している。次いで、3割台の支持で、「配偶者（パートナー）間におけるコミュニケーションがちゃんととれていないから」（37.7%）、「配偶者（パートナー）間の暴力は、犯罪であり人権侵害であるという認識が低く、配偶者（パートナー）に対する暴力を容認する社会通念があるから」（34.7%）、「薬物依存、アルコール依存、ギャンブル依存の問題があるから」（31.5%）、「女性に対する差別的な意識が存在するから」（31.1%）が続いている。

●男女を比較すると「配偶者（パートナー）間におけるコミュニケーションがちゃんととれていないから」とする回答は男性（42.2%）の方が女性（34.2%）より多く（8.0ポイント差）、反対に「配偶者（パートナー）間の暴力は、犯罪であり人権侵害であるという認識が低く、配偶者（パートナー）に対する暴力を容認する社会通念があるから」とする回答は女性（37.7%）の方が男性（31.9%）を上回っている（5.8ポイント差）。



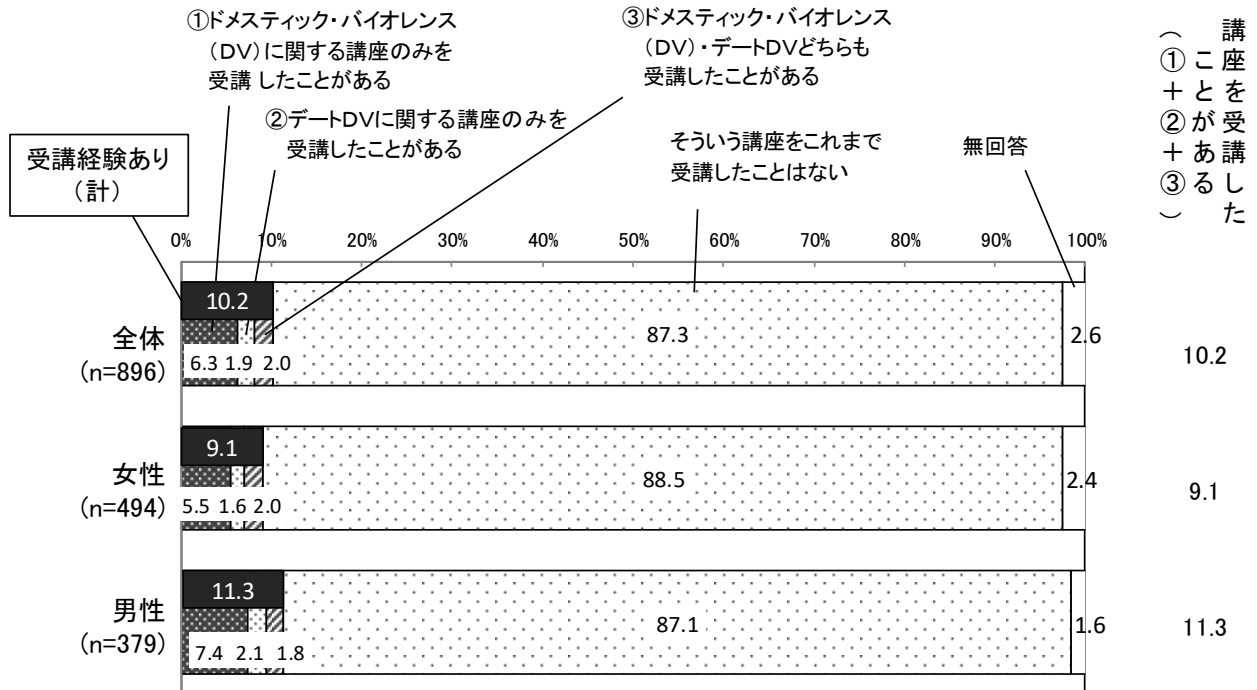
問14 ドメスティック・バイオレンス（DV）は大人だけの問題ではなく、恋愛関係にある若者の間でも同じような暴力（デートDV）が起きています。あなたは、デートDVによる被害を経験したり見聞きしたことがありますか。（○は1つ）

- 「直接経験したことがある」及び「直接経験したことはないが、自分のまわりに経験した（している）人がある」を合わせた回答は 8.9%で、さらに「一般的な知識として知っている」、「デートDV という言葉を聞いたことがある」まで含めた認知している人の割合は 73.7%であった。
- 問12と比較をすると、DV に比べデートDVを認知している割合は 18.8ポイント（DV92.5%、デートDV73.7%）、自分や身近な人が経験した人の割合は 14.0ポイント（DV22.9%、デートDV8.9%）下回っている。



問15 これまで、ドメスティック・バイオレンス（DV）またはデートDVについて、講習会等を受講したことがありますか。（〇はいくつでも）

- DV やデート DV ついて、講座を「これまでに受講したことがない」とする回答は 87.3%であった。
- 「講座等を受講したことがある（計）」とする回答は、男性（11.3%）の方が女性（9.1%）を上回っている（2.1ポイント）。



問17 男女共同参画を進めていくために、行政が力を入れることは何だと思われますか。(〇はいくつでも)

- 最も回答が多いのは、「育児休業制度の充実や労働環境の整備」(52.0%)、次いで「保育所等、その他子育てに関する施設やサービスの充実」(50.6%)、「高齢者や病人の施設や介護サービスの充実」(50.1%)、「子育てで仕事を退職した人の再就職支援」(48.9%)の順で選択されている。
- 男女差のある項目としては、「男女の平等や相互理解に関する学習機会等の充実」とする回答が男性(34.0%)の方が女性(28.5%)より5.5ポイント上回った。反対に、「高齢者や病人の施設や介護サービスの充実」とする回答が女性(55.9%)の方が男性(43.0%)より12.9ポイント上回っている。この項目については、問9での介護の現実の担い手も女性中心であることが意識の差に反映したと推察される。
- H26 県調査と比較して選択率が減少した項目には、「保育所等、その他子育てに関する施設やサービスの充実」(H26 県調査 56.6%→今回 50.6%の 6.0 ポイント減)、増加した項目として「労働時間の短縮、在宅勤務の普及など働き方の見直し支援」(H26 県調査 29.7%→今回 35.2%の 5.5 ポイント増)、「女性や男性の生き方等の悩みに関する相談の場の提供」(H26 県調査 16.0%→今回 21.5%の 5.5 ポイント増)がある。

